

## グローバリズムへの叛逆

～以下、書評『グローバリズムへの叛逆（小倉和夫 著）』（評者 山内昌之）〈毎日新聞（04.9.19）より〉～

注：・・・・・・は省略部分です。

### 反体制の代替としての反地球化

グローバリゼーション（世界化）と呼ばれる現象は、経済の市場原理が世界全体を支配しはじめたことを意味する。同時に、民主主義、市民の自由、人権の保護、環境の保全といった政治的理念が世界で共有されるようになった面を指すことも多い。

・・・・・・何が世界化あるいは国際化しているのか、必ずしもその主体がはっきりしないところに、反グローバリズムの特徴がある・・・・・・。それは、グローバリゼーションの内部矛盾として現れたものだけでなく、主体性や自己の回復として出現するものもあるからだ。また、グローバリゼーションによる同化や均質化がかえって破壊や疎外や排除を生んだことへの反動という場合もあるだろう。

・・・・・・反グローバリズムが反アメリカニズムや反資本主義の形をとり、ソ連や共産主義の崩壊に伴う二十一世紀の反体制イデオロギーの代替物となった・・・・・・。もっとも、共産主義運動では行動理念上の主体が階級や国家であったのに、現在の反グローバリズム運動の担い手は「流動的な、容易につかみにくい集団」だという違いも無視できない。したがって、反米・反アメリカニズムとは、アメリカ人への敵意やアメリカ国家への反逆ではない。むしろ、アメリカとその国民が「体現しているものに対する叛逆であり、焦点の定まらない、流動的なもの」といってもよい。

反アメリカニズムがテロ行為とたやすく結びつくのは、ほかならぬ反アメリカニズムの焦点が明確でなく、反体制のシンボルとして反アメリカニズムが利用されているからだ・・・・・・。現在の体制に代わる新たな体制について別の道が見えてこないのも特徴である。アメリカの一極支配を批判するのはたやすいが、市場原理や民主化を拒否して別の代替物を出すことはむずかしいのだ。

・・・・・・文化のグローバリゼーション・・・・・・。中国でさえ西欧文化やその知的産物の吸収に熱心であり、代替物の提供に消極的な現在、欧米の知的な世界支配に抵抗するのはイスラームの「原理主義」を除くとあまりにも少ない。標準化され均質化された衣食住の文化、ハリウッド映画、ディズニーランド、ロック音楽など、世界はアメリカ文化の氾濫におおわれている。しかし皮肉なことに、グローバリゼーションは各国による民族的な文化のアイデンティティを模索させるような反動をまきおこした。

他方、グローバリゼーションによる相互依存の深まりによって、第三世界も自らの責任を自覚すべき時代となった。国際社会の権力構造も流動化するのを避けられない。脅威の対象が自明でなくなると問題や地域によって同盟関係の組み替えも起こってくる。イラク戦争をめぐる独仏の対米留保やアメリカのいう「有志連合」などは冷戦時代であれば考えられなかった現象であろう。また、国際的な反グローバリズム市民運動の「世界社会フォーラム」がダボスの「世界経済フォーラム」の向こうをはって開かれている。

しかし、自らの運動の制度化や体制化を拒んでいる限り、アメリカの体現する精神と異質の考えを出せるはずもない・・・・・・反発だけでは新たなパラダイムによる国際政治経済の担い手になりそうにもない・・・・・・。